

陽の里

発行 平成12年1月1日



社会福祉法人 新生会
総合ケアセンター

サンビレッジ

No.69

2000年 **テーマ** 第1回「介護の質の向上を目指して」現場からのメッセージ



▲左から 洋子・マーフィーさん、マイケル・スカーレット氏、桜田りえ (クイーンエリザベスセンターにて)

二〇〇〇年おめでとうになります

ビジネス・企画開発バラットヘルスサービス統一部長
マイケル・スカーレット

皆様お元気ですか。新しい年二〇〇〇年を迎えおめでとうございます。一九九九年はサンビレッジから沢山の職員が研修に来られ、本当に嬉しく思っています。そして私もそちらを七月に訪問することができ、充実した年でした。一九九九年はとてもエキサイティングな忙しい時期で、建物の新築が目まぐるしく実施されました。クイーンエリザベスセンターではリハビリテーションセンターと緩和ターミナルケア病棟がオープンしたばかりです。素晴らしいモダンなデザインとなっており、特にリハセンターは国内一と言われていると思います。皆様にも是非見学してほしいと思います。現在北欧外のミッドランドでは60床のホステルを新築中です。二〇〇〇年三月には完成予定です。その上にこれから医務局部とACATのオフィスを現在の4階から1階に移動する予定です。来年の三月には完成する予定です。そのほか30床の高齢者評価と問題行動アセスメント棟、30床の痴呆性老人専用ナーシングホームも本館に新築されます。そのための職員の移動とサービスの増加も企画され、チャレンジの時期を迎えています。バラット総合病院では、二〇〇〇年二月に事故緊急部(ER)、集中治療病棟、放射線室、外来部が新築開始で二年後に完成予定です。その他として、連邦政府と州政府からの予算削減のために、厳しく運営しなければいけなくなりました。嬉しいことに非常緊急コール制度はほとんど拡大しています。サンビレッジの職員、そして学生さん達も、毎年元気に研修に来て頂いて、皆様の意欲には本当に感動させられます。私たちは日本のこれからの介護保険を大変興味深く見守りたいと思っています。デイセンターの職員であるリンジー・ファウラーとマーガレット・ピンカーの訪問について心からお礼を申し上げます。それからステイブ・デミーとスンドラム・シバマレーの訪問もよろしくお願い致します。皆様のご健勝を祈り、二〇〇〇年もよろしくお願い致します。

新年あけまして

おめでどういづいづいいます

社会福祉法人 新生会理事長 石原 美智子

二〇〇〇年の幕開けです。一九〇〇年代を生きたお年寄りと共に、新しい年を迎えることが出来ましたことを嬉しく思います。一九〇〇年代は激動の百年であったでしょうが、この百年を生きられたお年寄りの顔からは、むしろ、穏やかな表情が見られます。このホームからますます多くの長生きされる方があられますように願っています。

また、今年介護保険という新しい制度がスタートする記念すべき年でもあります。私たちは既に、四半世紀をこの高齢者福祉の世界で生きてきました。しかし、日本中がそれを制度として発足することとは喜ばしいことです。

昭和四十年代に既に、地域医療を支えてきた前理事長が、これからは介護の時代が来ると老人ホーム

ムづくりにも適進し、昭和五十一年にこのサン

ビレッジ新生苑が誕生しました。その後、介護保険時代の先取りと

いうことで厚生省のモデル事業として自由契約型特別養護老人ホーム

が生まれました。前年に前理事長が他界したことで「今村勲記念館」と命名しました。

時代と共に在宅介護支援センターや訪問看護

ステーション、デイセンターA型、E型など

が生まれました。前年に前理事長が他界したことで「今村勲記念館」と命名しました。

▲理事長 石原美智子



▲右手がマヒの方でも左手で挑戦

在宅サービスの手がけ、地域の老人介護の拠点としての役割を担うようにまで成長できたことは幸せなことです。

サンビレッジ新生苑が充実してきた時期に、サンビレッジ国際医療福祉専門学校が誕生しました。

オーストラリアとの交流から国際レベルの専門家を養成する夢が実現しました。

オーストラリアの福祉は大変高いレベルにあるにもかかわらず、

今まで日本では北欧の福祉のように注目を浴びることはありませんでした。最近、特に介護保険が言われるようになってシステム的に学ぶべき点が多く、注目されるようになりました。

姉妹施設のクイーン・エリザベス・センター・パララットとはま

すます交流が深まり、相互に行き来する機会が増え、友好が濃厚になりました。彼らの最先端を行く歩みは、私たちに多くの示唆を与えてくれ、正しい道を指し示してくれます。また、彼らも私たち日本人のきめの細かい介護や努力を評価し、お互いの良い面を学びあう関係が確立されました。

日本は世界一の高齢社会を形成する国となります。その中で介護保険がスタートし、新しい高齢社会を構築しなければならぬという使命が、我々介護の専門職に求められています。多くの知恵と工夫と情熱で、効率と質の高さを求めて努力することが求められる時代です。この二十数年という実績の積み重ねが、私たちにその夢を実現する力を与えてくれるはずです。

オーストラリアから学び、共に力を合わせ、利用者、家族、地域住民、そして私たち職員や学生たちで新しい道を模索し、歩んでいきます。

私たちは時代と共に多くの理解者を得、今後ますますその数は多くなるでしょう。特に若者が福祉を理解し、参加してきています。

二〇〇〇年は、介護の時代、福祉の時代です。それは取りも直さず、物質の時代から心の時代への変化を意味します。

二〇〇〇年を共に歩んでいきましょう。

第二回「介護の質の向上を目指して」

現場からのメッセージ

ホームの暮らしが住みやすいと感じられる「生活の質」とは何で見ることが出来るのでしょうか。建物の様に目に見える所はよく分かりますが「介護の質」の様に目に見えにくい所もあります。サンビレッジは開苑当初から利用者の立場に立つ事を基本理念として「介護の質」の向上を目指し、取り組んできました。しかしまだまだ未完成な所を認識しております。今回から介護保険導入のこの二〇〇〇年を機に今まで取り組んで来ました「介護の質」を紹介していきたいと思えます。

自由を奪う「つなぎねまき」

スズラン棟担当ヘルパー 植村 純子

「つなぎねまき」とは、痴呆の高齢者がおむつを外してしまわないよう、上下がつなぎになっていて、ファスナーにはカギがかかり、自分では脱ぎ着ができないようになっていたもので、抑制ねまきともいわれる。街の介護用品売場にも置いてあり、誰でも簡単に入手することができる。これだけ普及したのも痴呆性高齢者の不潔行為を未然に防止できるからであり、その介護が福祉の現場や在宅において大きな負担になっていることがうかがえる。

当事者であるお年寄りにもかなりの苦痛を強いるものである。私に実際につなぎねまきを着てみたことがあるが、服にカギをかけられるということに対しては、精神的にも身体的にも大きなストレスを感じた。

カギを持っていくヘルパーの方が絶対的に優越した立場にあつて、服だけではなく生活すべてを支配されている気持ちになった。おむつは使用しなかったものの、汗で濡れてくる衣類を着替えることもできず、濡れた衣類が長時間肌に触れているのは不快であった。もしこれが濡れたおむつだったら、すぐにでも取ってしまったら、さう。しかし当然ながら自分ではつなぎねまきを脱ぐことはできない為、その間ずっと不快感が続いた。普

段なら自分でやれることができない、できるのに許されないとということに苛立ちやストレスにつながり、心身共に疲れ果ててしまった。

痴呆性高齢者にもそれまで築き上げてきた人生があり、生活歴がある。そのプライドが残っているのにもかかわらず、衣類にカギをかけられたら、同じくそれはかなり大きなストレスになるはずである。その方の自由を一方的に奪ってしまうという事は、お年寄りの人格や誇りを傷つけてしまわないだろうか。

また、便秘の経験は誰にでもありと思うが、便秘による腹部の膨張感や気持ちの悪いものである。痴呆性高齢者の場合、それが弄便（便をもてあそぶ）行為として現れてしまうことがある。しかし、濡れた衣類（またはおむつ）の感触の気持ち悪さや便秘時に感じる不快感は、私達が感じるのと同じ感覚である。痴呆性高齢者にはコミュニケーション傷害や行動障害があるために適切な表現ができないだけなのである。普段私達が着替えをするのと同じように、痴呆性高齢者もそれまでの生活を続けたいと願っていると思う。

それでは、つなぎねまきを着せず、お年寄りがしてしまう「おむつ外し」や弄便行為を防ぐにはどうしたらいいのだろうか。具体策としては、

排泄チェック表によるおむつの随時交換や、汗疹の予防と治療、自然排便を促す為に一緒にいきむ、医療的側面からの排便のコントロール等が挙げられる。しかし、不潔行為を防ぐという目的でこれらを行うよりも、お年寄りの立場に立つて、その苦痛や不快感を取り除く為には何が出来るのかという視点から取り組むことが必要なのではないだろうか。

おむつ外しのあった利用者で、こまめなおむつ交換と同時に心理的側面から働きかけることによって、おむつ外しやその他の問題行為が軽減したケースもある。ヘルパーとの日々のかかわりの中で信頼関係を築き上げていくことにより、精神的な安定を図り、日常生活に笑顔を取り戻すことができた。安易に便利な介護用品に頼るのではなく、普通の生活に向けての援助がなく、普通の生活に向けての援助が、介護の専門性や介護の質の向上につながると思う。



▲介護用品として市販されているカギ付のつなぎねまき（脱いでしまうと右手は縛られている）

赤い郵便ポスト

サンビレッジにいらっしゃるお年寄りのお一人おひとり、少しでも気持ち良く生活していただけるように評価委員会が設けられています。利用者の家族や住民の代表など九名の外部評価委員は自由にサンビレッジを訪れて、気づいたことや利用者の声、要望を遠慮なく施設側に伝えます。その一つひとつの課題について、十一名の内部評価委員と共に検討して改善をはかっていきます。毎回の話し合いはとっても熱心で前向きです。その話し合いの成果の一つとして、本物の郵便ポストが施設内に設置されました。



▲バラ記念館玄関前に設置された赤いポスト

外部評価委員 樋口通子

家族と離れ、また慣れ親しんだ土地とも離れ、サンビレッジに生活を移したお年寄りにとって、家族や親しい人たちからの便りはうれしいものです。孫からのハガキを何度も読み返したり、リハビリに励もうと意欲がわいたり、話題が増えたりと、一通の便りが届くことは元気の源が届くことのようにです。

でも、便りを受け取るだけでなく、こちらからも便りを出したいと思っておられる方も多いのです。施設内の目につく場所に赤い、それも昔風の丸い形のポストがあって、郵便局の人が集めに来てくれる姿を見ることができたらどんなにいいでしょう。そのポストに自分の手で投函できたら満足が得られることでしょう。今までできてきたことが、施設に入ったことでできなくなる。仕方がないとあきらめる。実際にはそのようなことが、それぞれの人にたくさんあると思います。しかし、そのような事柄の一つでも少なくしていきたいように、努力していきます。郵便ポスト設置も、最初は「私設のポストならすぐ



▲毛筆で年賀状を書く練習の様子

にできるけれど。でも、本物のポストならもっとお年寄りの方々も喜ばれるだろうし、手紙を書いたり、出したりしたいと意欲もわくでしょうね。だけど、本物を置くには色々決まりがあって、難しいらしい」と、話し合っていたのです。しかし、何度も関係機関に実状を説明して、許可が下りたのです。ハガキや切手は施設内の売店で扱っていますし、書くことが不自由な方には職員やサンビレッジ国際医療福祉専門学校の学生が代筆をいたします。赤いポストは人の心と心、地域社会とサンビレッジを結びつけるよい働きをしてくれることでしょう。

皆様方のサンビレッジ宛のお便りもお待ちしています。

お知らせ

平成11年度共同募金50周年記念配分事業による配分金を頂き、入所者外出用車両を購入致しました。ありがとうございました。



外部評価委員紹介

住民代表	池田町	松岡	雅子	町会議員
"	"	岡崎	善弘	民生委員
"	"	樋口	通子	絵本作家
利用者家族	"	竹中	晃	自営業
"	大垣市	山岸	直絵子	教員
学識経験者	各務原市	金丸	義敬	岐阜大学教授
"	東京都	大脇	雅子	参議院議員・弁護士
福祉専門職	池田町	鬼頭	孝	さくら苑相談指導員
"	大垣市	奥堀	恵	(株)新生メディカル